

進化倫理学の新たな擁護 ——道徳的亜信念からの論証⁽¹⁾

千葉 将希

1. はじめに

進化心理学 (evolutionary psychology) は、人間行動の背後にあるさまざまな心理メカニズムを、自然選択に基づく進化の観点から次々と解き明かしてきた。なかでも倫理学にとってひととき興味深いのが、血縁選択理論や互惠的利他主義理論など、われわれがもつ道徳性の進化的由来に関わる研究である。こうした道徳性の由来に関わる進化心理学の研究が進むにつれて、道徳を専門的に研究する倫理学もまた、進化心理学の知見を積極的に取り入れるべきだという見方が出てくるようになった (see James 2011)。このように、進化心理学をはじめとする進化学の知見によって倫理学の研究をなんらかの仕方でも推し進めようという試みは、一般に「進化倫理学」(evolutionary ethics) とよばれる。

それでは、進化心理学の知見は、正確に言ってどのような点で倫理学の研究を推し進めるものなのだろうか。本論文では、この古くからある問題に対して、次のような1つの回答を与える。すなわち、進化心理学の知見は「道徳的亜信念」(moral alief) とよばれる、われわれのうちに根深く巣くう心的状態 (Gendler 2008a, 2008b; Kriegel 2015) の存在と特徴を教えてくれるがゆえに、われわれがもつ道徳判断やわれわれが従うべき道徳規範の研究を推し進めてくれるのである。言い換えれば、本論文は以下のような3段論法に集約される論証を行うことで、進化倫理学という試みの有効性を擁護するものである。

(1) 本論文は、筆者が2020年10月に第71回日本倫理学会大会でのワークショップ「なぜ倫理学に進化が必要か」で行った発表「道徳的アリーフと進化倫理学の擁護」に基づく。同発表に際して有益なコメントをくださったワークショップ企画者の皆さま、および会場にご参加くださった皆さまに、この場を借りて厚くお礼申し上げる。また、本論文の草稿に対して有益なコメントをくださった鈴木貴之研究室と藤川直也研究室の皆さま、および植原亮氏、片岡雅知氏、佐藤亮司氏、林禪之氏にも、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

【道徳的亜信念からの論証 (the argument from moral aliefs)】

前提1：もし進化心理学の知見が道徳的亜信念の解明をもたらすなら、進化心理学の知見は倫理学の研究を推し進める。

前提2：進化心理学の知見は道徳的亜信念の解明をもたらす。

結論：ゆえに、進化心理学の知見は倫理学の研究を推し進める。

この論証をできるかぎり擁護するため、本論文では大きく以下の3つのことを行う。まず第2節では、進化心理学と倫理学の関係に関して、進化心理学の知見は道徳的[・]信念の解明をもたらすがゆえに倫理学の研究を推し進めるとする立場を取り上げ、そこに1つの疑念が付きまとうことを見る。ついで第3節では、人間には信念とは別に亜信念とよばれる心的状態があるとす、Gendler (2008a, 2008b) が提唱した亜信念説の概略を見て取る。そして第4節では、偏見情動に関する進化心理学の研究を引き合いにしつつ、進化心理学の知見はむしろ主に道徳的[・]亜信念の解明をもたらすがゆえに倫理学の研究を推し進めるという立場を示す(論証の前提2と結論)。

本論文の具体的な議論に入るまえに、2点だけ注意点を述べておきたい。第1の注意点は、本論文の中心を占める“alief”や“alieve”という用語の訳に関するものである。これらはそれぞれ、“a”という頭文字と“belief”や“believe”という英単語とを結び合わせて造られたGendler (2008a, 2008b) の造語であり、きわめて大雑把に言えば「一見して信念のようだが信念とは似て非なる、より原始的な心的状態」のことを指す。また、“a”という頭文字は、のちほど詳しく触れるように、aliefがもつとされる“a”で始まるさまざまな特徴を表している。こうした事情を踏まえ、本論文では、名詞の“alief”に対しては「亜信念」、動詞の“alieve”に対しては「亜信する」という訳語を提案することとしたい⁽²⁾。この訳語案は、意味と音声の両面で優れていると考えられる。まず意味のうへでは、「亜」とは「なにかに準ずる」ことを表す漢字であるから (e.g., 「亜流」, 「亜大陸」), 「亜信念」と言うことで「信念のようだがそれよりは原始的ななにか」という内容を表すことができるだろう。また、音声のうへでも、「亜」(簡体字では“亚”) は西洋語の“a”に対する由緒正しい漢字での音訳であるから (e.g., 「亜細亜」(Asia), “亚里士

(2) 名詞の“alief”については、これまで「偽念」(富田・野山 2014) や「隠念」(朱 2019) といった漢語訳が日本語や中国語の論文でなされている。しかし、この訳だとそのままでは日本語で動詞にしにくいし(「信念」—「信じる」に対応する仕方でこれらを動詞にすると「偽する」や「隠する」となり、「偽る」や「隠れる」と紛らわしい)、まだ定訳にもなっていない。差し当たりカタカナ語で「アリーフ」や「エイリーフ」などとよんでおくという手もあるが、“belief”に「信念」という漢語訳がある以上、審美的には漢語訳のほうが望ましいだろう。なお、まったくの偶然であるが、中国語でも現代美術家の徐坦(2010)によって“亜信念”(亜信念)という新語が(sub-beliefの意味で)作られている。ここから、この語が中国語の語感としても十分に成り立つことが伺えるため、語義の転用拡大によって(もしくは単純に多義語として)中国語でもそのまま“alief”の訳語に用いることができると考えられる。

多徳”(Aristotle))、やはり「亜信念」と言うことで“a”(亜) + “belief”(信念)という“alief”のカバン語的語源を反映することができるだろう。

第2の注意点は、本論文の独自性に関するものである。本論文の最終的な主張をきわめて大まかに述べると、「進化心理学の知見は、人間がもつ好ましくない心的傾向性の存在や特徴を明らかにしてくれるとともに、どうやってそうした好ましくない心的傾向性を乗り越えるべきかに関する規範を得ることにもつながる」というものである。こうした主張は、進化心理学という試みの有効性をもとと受け容れている者の多くにとっては目新しいものではないだろうし、実際本質的に類似した主張は他の論者によってもなされている (e.g., Kenrick 2011)。しかしながら、本論文の議論は、このお馴染みの主張を「亜信念」という Gendler (2008a, 2008b) が提唱した概念を持ち出すことで哲学的に洗練させている点で、これまでの論考とは一線を画す。もし本論文の議論が成功していれば、進化心理学の知見が教えてくれる人間の好ましくない心的傾向性の多くは、道徳的亜信念とよばれる心的状態にほかならない。この点は、(筆者が知るかぎりでは) これまで進化倫理学という試みの有効性をめぐる論考において明確には指摘されてこなかった。したがって、すでに進化倫理学という試みの有効性を受け容れている者にとっても、本論文によってより哲学的に洗練された仕方での試みの意義を捉え直すことができるようになってきていることを願う。

2. 進化心理学と道徳的信念

進化心理学の知見は、正確に言ってどのような点で倫理学の研究を推し進めるのだろうか。1つの考えは、われわれ人間の道徳判断 (moral judgment) の解明をもたらすがゆえに倫理学の研究を推し進めるというものだろう。こうした道徳判断の実態の解明は、一般に「記述的倫理学」(descriptive ethics) とよばれる。記述的倫理学では、「われわれはなにをなすべきか」という道徳規範の探究ではなく、むしろ「われわれはどのような判断を下すか」、「そこにどのような要因が働いているか」といった道徳に関する実態の記述が目指される。記述的倫理学に属する研究の例としては、たとえば発達心理学の観点から子どもの道徳判断の発達過程を調べた Kohlberg (1969) の研究や、社会心理学の観点から人々の権威への服従傾向を調べた Milgram (1974) の研究、さらには脳神経科学の観点からトロッコ問題に関する人々の判断を調べた Greene et al. (2001) の研究などが広く知られる。

進化心理学の知見が倫理学の研究を推し進めるという主張も、しばしば、進化心理学の知見がこうした記述的倫理学の研究を推し進めるという意味でなされる (Kitcher 1994)。すなわち、進化心理学の知見によって、われわれがなぜさまざまな道徳判断を下すようになったのかが自然選択の観点から理解できるようになるというわけである。たとえば、われわれが「血縁者は助けるべき存在だ」という道徳判断を下しがちだという事実は、血縁者を助けることが自らの遺伝子を助けることにつながるという血縁選択のメカニズム (Hamilton 1964) から説明され

るかもしれない。同様に、われわれが「仲間を裏切るのは正しくない」という道徳判断を下しがちだという事実は、仲間と互恵的な関係を保つことが互いの適応度を高めるという互恵的利他主義のメカニズム (Trivers 1971) によって説明されるかもしれない。このように考えれば、たしかに進化心理学の知見が倫理学の研究を推し進めるという主張は、非常に真つ当なものだと思われる。

それでは、進化心理学が由来を明らかにしてくれるわれわれの道徳判断とは、正確にはいったいかなる種類の心的状態なのだろうか⁽³⁾。それは「道徳的信念」(moral belief) なる心的状態だ、というのが1つの常識的な答えだろう。一般に信念とは、「地球は丸い」や「1足す1は3である」といった判断のように、真理適合的な (truth-apt)、すなわち真であったり偽であったりするような、一種の命題的態度である (see Fisher 2011; 小口 2017)。メタ倫理学における認知主義 (cognitivism) の考えによれば、われわれが自らの道徳判断を口にするとときに表出しているのも、情動や欲求ではなくまさにこの信念という心的状態にほかならない (Fisher op. cit.)。たとえば、われわれが「仲間を裏切るのは正しくない」と言うとき、われわれは「仲間を裏切るのは正しくない」という内容に対し、信じるという態度を表出している (命題的態度)。また、この道徳判断は「地球は丸い」という文と同様に、真または偽の真理値をもつ (真理適合性)。こうした認知主義の考えに立つとするなら、進化心理学が由来を明らかにしてくれるわれわれの道徳判断もまた信念の一種にほかならないと考えるのは、1つの自然な見方であろう⁽⁴⁾。

しかしながら、進化心理学の知見によってわれわれがもつ多くの道徳的信念の由来が理解できるようになるという見方には、ある大きな疑念がつきまとう。すなわち、仮にわれわれの祖先がもっていた基本的な道徳的信念がもともとは自然選択に由来するのだとしても、結局はそれ以外のさまざまな要因、特に諸々の後天的要因の影響でいくらかでも変化を被りうるのではないか、という疑念である。たしかにわれわれは、紛れもない進化の産物であるが、同時に日頃から文化や理性的思考といった後天的要因の影響も受けている。それゆえ、現代のわれわれがもつ道徳的信念の多くもまた、むしろ文化や理性的思考といった後天的な要因の影響を強く受けて生じたものなのかもしれない (FitzPatrick 2015; Huemer 2016)⁽⁵⁾。そればかりか、文化や理

(3) 厳密には、進化に直接由来するのは個々の道徳判断ではなく、その形成メカニズムとすべきかもしれないが、ここでは簡便さのため、形成メカニズムを通じて進化の影響を受けて生じた道徳判断のことを「進化に由来する道徳判断」と表現する。これ以降出てくる道徳的信念や道徳的亜信念についても同様である。

(4) 以降では、この認知主義がそれなりに正しいということをデフォルトの立場にして議論を進めることとする。すなわち、少なくとも一部の道徳判断は信念という形式をとっているということをいったん受け容れたうえで、しかしよくよく検討してみると実は多くの道徳判断はむしろ亜信念という形式をとっているという議論を行うこととする。

(5) もともと FitzPatrick (2015) や Huemer (2016) がこうした議論を行ったのは、いわゆる進化的暴露論証を批判するという文脈においてである。進化的暴露論証とは、非常に大まかに述べれば、われわれの道徳

性の力で進化の影響を乗り越え、新たに自らの信念を形作っていくことができる点にこそ、人間を人間たらしめる特徴があるのだ、という見方すらできるかもしれない。仮にそうだとしたら、進化心理学は現代のわれわれがもつ道徳的信念の大部分とはほとんど無関係なのではないか、という疑念が湧き上がってくる。

以上のような疑念は、われわれの道徳的信念がここ数百年や数十年で文化や理性的思考の進展とともに大きく変化してきたという観察によっても強まる。Huemer (2016) によれば、人々の道徳的信念をめぐる顕著な事実の1つは、非平等主義的なものの方から平等主義的なものの方へと人々の道徳的信念が変化してきた点にある。その1つの代表的な例は、人種差別をめぐる人々の道徳的信念の変化だろう。人種差別の克服は今日でも紛れもない大きな課題であるが、それでも過去に比べれば、人々の信念は人種差別的なものから反人種差別的なものへと大きく変わってきた。こうした変化が生じているのは、たとえば平等や人種差別とはなにかをめぐって、人々が文化のあり方を見直したり、理性的思考を働かせてきたりしたためだろう。

こうした道徳的信念の変化がいかに目を見張るものかを見て取るため、人種差別をめぐる人々の信念の変化を示す象徴的な事例をいくつか見てみよう。たとえば、HumeやKantといった哲学者は啓蒙主義を代表する最も偉大な（道徳）哲学者だとされるが、非白人が白人よりも劣った存在だという見解をもっていたとしばしば言われる（Immerwahr 1992; Hill & Boxill 2000）。事実、Humeはある箇所、「わたしは、黒人が白人よりも生まれつき劣っているのではないかと思うくらいがある」（Hume 1987, p. 208, n. 10）、「たしかにジャマイカでは、人々が教養ある1人の黒人の話をする。しかし彼が称えられるのは、いくつかの単語をはっきり話すオウムと同じで、わずかな業績を成し遂げたためだという公算が高い」（ibid.）といった人種差別的な言葉を残している。こうした発言は、同時代人のあいだでは決して珍しいものではなかったかもしれないが、現代では大部分の人々にとってまったく受け容れがたいものに映るだろう。また、アメリカ南部では1860年代の南北戦争に至るまで黒人奴隷制度が認められていたし、南アフリカでは人種隔離政策が1990年代まで残っていた。しかし、少なくともこれらの制度は当該社会においてすでに廃止され、歴史の汚点とみなされている。

こうした数百年や数十年単位での道徳的信念の変化は、自然選択によって容易に説明できるものではない。まず、数百年や数十年という単位は、進化の観点から言えばあまりにも短いため、こうした変化が自然選択によって生じたとは考えにくい（Huemer 2016）。また、われわれが新たにもつようになった道徳的信念のほうがそれまでもっていた道徳的信念よりも進化的に適応的だったという保証もない（ibid.）。再び人種差別を例に出すと、必ずしも反人種差別的な信念の持ち主のほうがそうでない人々よりも1860年代のアメリカ南部や1990年代の南アフリカにおいて適応度が高かったとはかぎらない。むしろ、歴史において適応度が高かった人々

判断が進化という真理追跡的でない過程に由来するということを根拠に、道徳的懐疑論を導き出そうとする論証である（see Kahane 2011）。

というのは、往々にして高い地位につき、それゆえ抑圧的で人種差別的な信念を振るっていた側の人間なのかもしれない(ibid.)。そうだとすると、ここ数百年や数十年といった単位で広まったわれわれの道徳的信念の多くは、自然選択に由来するとは考えにくい。

もちろん、進化心理学の知見がどれくらいわれわれの道徳的信念の解明を推し進めるのかという問題は、結局は程度の問題であるし、経験的な問題でもある。ひょっとすると、今後の進化心理学の進展次第では、十分に多くの道徳的信念が自然選択に由来するということがわかるかもしれない。しかし、以降で考えたいのは、仮にそうはならなかったらどうなるかという問題である。もしわれわれの道徳的信念の大部分が自然選択に由来するものではないとしたら、進化心理学の知見が倫理学の研究を(十分に)推し進める可能性はなくなってしまうのだろうか。以降では、必ずしもそうではないという見方を擁護したい。仮にわれわれの道徳的信念の多くが進化の影響から抜け出しているとしても、なおも進化の影響を色濃く残す心的状態がほかにあると考えられるからである。それは、道徳的^レ信念とよばれる心的状態である。まずは「^レ信念」がどのような概念であるかを見て取り、ついで進化心理学の知見は(少なくとも)われわれの道徳的^レ信念の解明をもたらすがゆえに倫理学の研究を推し進めるということを示そう。

3. ^レ信念説

「^レ信念」とは、主に信念と欲求からなる既存の素朴心理学を拡張すべく、Gendler (2008a, 2008b) が提唱した心的状態の概念である。素朴心理学に^レ信念なる心的状態を加えるこうした見解のことを、「^レ信念説」(alief theory)とよぶこととしよう。では、「^レ信念」とは具体的にはどのような概念であり、どのような理由から必要とされるのだろうか。以下では、この概念を広めたGendler (2008a, 2008b) やKriegel (2015) の説明に従ってこれらの点を見ていくこととしよう。結論から言うと、^レ信念説の概要は大きく3つにまとめられる。第1に、^レ信念とは典型的には、ある人が自分の信念に反するふるまいをしたときに、信念に代わってその人のふるまいを説明するような心的状態である。第2に、^レ信念は英語の“a”で始まるさまざまな典型的特徴を備えている。そして第3に、^レ信念説は、近年の認知科学と親和的であるという点を論拠の1つとする。

信念概念の典型的役割

まず、^レ信念とは典型的には、ある人が自分の信念と食い違ったふるまいをしたときに、信念に代わってその人のふるまいを説明するような心的状態(の1つ)である(Gendler 2008a, 2008b; Kriegel 2015)⁽⁶⁾。たとえば、次のような事例を考えてみよう。

(6) 信念と食い違ったふるまいを説明するような心的状態は^レ信念以外にもある。Gendler (2008a) 自身が拳

【ラップトップ不調事例】

花子は、自分のラップトップには心もなければ責任能力もないと信じている。にもかかわらず、ラップトップの動作が遅いと、彼女はカッとなって「ふざけるな！」と責め立ててしまう。

この一見理不尽な花子のふるまいをどのように説明したらよいだろうか。彼女の信念によってこれを説明することには無理があるだろう。なぜなら、彼女の信念は「ラップトップに罪はない」というもので、彼女のふるまいとは食い違っているからである。では、代わりにどのような心的状態によって説明したらよいだろうか。亜信念説によると、「このラップトップは罪深い」という彼女の^{●●●}信念によってである。つまり、彼女は「このラップトップに罪はない」と^{●●●}信じていながら、「このラップトップは罪深い」と^{●●●}亜信しているがゆえに、つつい自らの信念に反するふるまいをしてしまうというわけである。

このように人が自らの信念に反するふるまいをするような事例は、日常生活においても実験的状况においても枚挙にいとまがない。亜信念によって説明されるべきふるまいの例として、Gendler (2008a, 2008b) 自身が挙げている例もいくつか見てみよう。

【ファッジ事例 (Rozin et al. 1986)】

人々は、イヌの汚物の形をしたファッジは口にしても無害なものだと信じている。にもかかわらず、心理学実験においてこれを(無害なものだとわかるような仕方)で出されると、口にするのをためらってしまう。

【ホラー映画事例 (Walton 1978)】

緑色のスライムお化けが出てくるホラー映画を鑑賞中のCharlesは、このお化けが画面の外に出てくる心配などないと信じている。にもかかわらず、彼はこの映画を観ながら悲鳴を上げ、必死に椅子をつかんでしまった。

亜信念説によれば、これらのありがちなふるまいもまた、亜信念なる心的状態によって説明される。心理学実験の参加者が「この物体は口にしても無害だ」と^{●●●}信じていながら、それでもこれを口にするのをためらうのは、「この物体は口にすると有害だ」と^{●●●}亜信しているからである。同様に、ホラー映画を観ているCharlesが「このお化けは自分を襲いに来ない」と信じていながら、あたかも現実のお化けに^{●●●}身構えるようなふるまいを示してしまったのは、「このお化けは自分を襲いに来る」と^{●●●}亜信していたからにほかならない。このように亜信念説による

げる例は、他者への欺瞞、自己欺瞞、確信度の揺らぎ、一時的忘却である。したがって亜信念説の主張とは、「信念と食い違ったふるまいの(すべてではなく)一部は亜信念によって説明される」というものである。

と、われわれが日々示すふるまいの多くは、実は亜信念なる心的状態によって説明されるのである。

亜信念の典型的特徴

亜信念はまた、英語の“a”で始まるような多くの典型的特徴を備えてもいる (Gendler 2008a, 2008b)。すでに述べたように、「亜信念」(“alief”) という用語も、まさにこの点に引っ掛けて作られたカバン語である (“a” + “belief”)。ここでは紙幅の都合上、これら典型的特徴のすべてに触れることはできないため、「亜信念」概念を直観的に把握するうえで特に重要と思われる3つの特徴に絞って見ていくこととしよう。すなわち、「自動的」(automatic)、「感情負荷的」(affect-laden)、「人間と人間以外の動物によって共有されている」(shared by human and non-human animals) の3つである。

第1に、亜信念は「自動的」な心的状態とされる。これは、亜信念という心的状態が意識的思考の介在なく働いてしまう心的状態だということである。たとえば、「このラップトップに罪はない」と信じている花子が、それにもかかわらず動作の遅いラップトップをついつい責め立ててしまうのは、彼女において意識的思考の介在なく「このラップトップは罪深い」という亜信念が働いてしまうからである。ただしこのことは、亜信念が必ず主体の意識的気づきの外にあるということの意味しない (Gendler 2008b)。亜信念の作動そのものは無意識的だが、それでも主体が亜信念の存在に意識的に気づくことは十分にありうる。たとえば、花子はついつかりラップトップを責め立てつつ、こうしたふるまいを引き起こした自らの心的状態 (i.e., 亜信念) に意識的に気づいてもいるかもしれない。

第2に、亜信念は「感情負荷的」な心的状態とされる。これは、より正確には、亜信念という心的状態が表象内容 (representational content)、感情内容 (affective content)、行動内容 (behavioral content) の3つを含んだ4項関係で表される (i.e., “S alieves <R. A! B!>⁽⁷⁾”) ということである。したがって、亜信念の内容に関するこれまでの記述は、厳密には不正確である。たとえば、「このラップトップは罪深い」という花子の亜信念は、厳密に言えば〈ラップトップ。罪深い！ 責めろ！〉といった内容のものであり、それぞれ「ラップトップ。」が表象内容、「罪深い！」が感情内容、そして「責めろ！」が行動内容に当たる。この点もまた、2項関係 (“S believes P”) で表される信念と大きく対比されるころだろう⁽⁸⁾。ただし、簡便さのためにわかったうえで「花子は『このラップトップは罪深い』と亜信する」などと表現するのは場合によっては無害だろうから (Gendler 2008b)、本論文でも特に正確に表現する必要がないかぎり、そうした略式の表現を用い続ける。

(7) 亜信念の内容に対するこの表記法は、Kriegel (2015) に基づく。

(8) Gendler (2008a) は、結局のところ亜信念は信念とは違って命題的態度ではないとする。

第3に、亜信念は「人間と人間以外の動物によって共有されている」心的状態とされる。この点は、亜信念という心的状態が信念や欲求よりも原始的な心的状態であるという点と深く結びついていると考えられる⁽⁹⁾。信念や欲求については、人間以外の動物もこれらをもつかをめぐって意見の対立があり、否定的な見解も根強い(e.g., Davidson 1975)。一方、亜信念については、環境内の諸特徴に対して然るべき反応ができる動物であれば人間に限らずもつことができるといのが、Gendler (2008b) の主張である。たとえば、彼女は亜信念によって説明されるべき動物行動の例として、カエルがBB弾を(ハエだと思い込んで)飲み込んでしまう事例(Fodor 1999)を挙げる。彼女によれば、カエルがこうしたふるまいを示すのは「BB弾はハエである」という亜信念が働いたからにほかならない。

亜信念説を支持する議論

亜信念説を支持する議論の1つは、「説明上の有用性に訴える論証」(the serviceability argument)とよばれる(Kriegel 2015)。これは、「亜信念」なる心的状態の概念を持ち出すことで、人々がときに自分の信念と食い違ったふるまいをするという一見不可解な現象がうまく説明できるという、すでに見た議論である。しかしながら、亜信念説を支持する議論はまだほかにもある。そのうちの1つは、「理論的統一性に訴える論証」(the theoretical unity argument)とよばれるものである(Kriegel 2015)。

理論的統一性に訴える論証とは、人間が信念と亜信念の両方をもつという見解は、近年の認知科学と親和的であるがゆえに支持されるという議論である。ここで言う「認知科学」とは、具体的にはKahnemann(2011)などが提唱した二重過程理論(dual process theory)のことである。この理論によると、人間の心はシステム1とシステム2という2つの認知処理システムからなる。システム1が情動や直観に関わる進化的に古いシステムであり、自動的で素早い認知処理を行うのに対して、システム2は理性や熟慮に関わる進化的に新しいシステムであり、意識的で遅い認知処理を行う。システム1とシステム2の区別はまた、コネクショニズムに基づく認知処理システムと古典的計算主義に基づく認知処理システムとの区別にも対応しているとされる(see 信原 2016)。

以上のような二重過程理論が亜信念説と親和的な理論であることを見て取るのはたやすい。というのも、両者のあいだには一定の対応関係があるからである。二重過程理論で言うシステム1とは、自動的で情動に関わる進化的に古いシステムであるから、それは結局亜信念という自動的で感情負荷的で原始的な心的状態を生み出すシステムだと考えられる。同様に、システ

(9) 亜信念の原始性は、Millikan (1995) の言う「オシツオサレツ表象」(pushmi-pullyu representation) を強く思い起こさせる特徴でもある。おそらく亜信念とオシツオサレツ表象とは、かなりの程度重なる心的状態なのだと考えられる。

ム2とは、意識的で理性に関わる進化的に新しいシステムであるから、やはり信念という合理性に関わる心的状態を生み出すシステムだと考えられる。二重過程理論が今日の認知科学における有力な理論だということを踏まえると、この点は亜信念説に対する強力な論拠となるだろう。

なお、このように亜信念をシステム1に関わる心的状態と捉えることで、「亜信念」概念がもつ説明上の役割がよりはっきりする。たしかに「亜信念」概念の必要性がわかりやすく出てくる典型的場面というのは、人々のふるまいがその信念と食い違っているような状況であろう。しかしながら、システム1が働くのはそのような状況だけではない。たとえ人々のふるまいがその信念と食い違っていないとしても、自動的で情動に関わるふるまいであれば、システム1によって生じていると言うべきである。たとえば、イヌの汚物の形をしたファッジを誤って有害なものだと信じている人がそれを避けようとするのは、まさにシステム1（によって生み出された「この物体は有害だ」という亜信念）のゆえだと考えるのが自然だろう。同様に、毎日のように同じ冷凍食品を反射的に買う人もまた、やはりシステム1（によって生み出された亜信念）のゆえにその冷凍食品を買い物かごに入れていていると考えられる。このように、生得的な反応であれ習慣的な行動であれ、日常生活におけるふるまいのかなりの部分が、システム1によって生み出された亜信念によって引き起こされているのである。

4. 進化心理学と道徳的亜信念

すでに見たとおり、われわれの道徳的信念の多くは文化や理性的思考といった自然選択以外の影響も色濃く受けているため、そこに進化の影響があったとしてもそれは非常に限られている可能性がある。しかしながら、もしわれわれに信念とは別に亜信念なる心的状態もあるとすると、ここに新たな可能性が開けてくる。すなわち、仮にわれわれの道徳的信念の多くが進化の影響を抜け出しているとしても、それとは別に道徳的亜信念なる心的状態があり、その多くがまだ進化の影響を色濃く残しているという可能性である。この場合、たとえ進化心理学の知見がわれわれの道徳的信念の多くと無関係だったとしても、多くの道徳的亜信念の解明をもたらすことを通じて倫理学の研究を推し進めてくれることが期待できる。

以下では、この可能性をできるかぎり擁護することとしよう。残る議論は、次の2つの論点に集約される。第1に、信念のなかに道徳的信念とよばれる心的状態があるように、亜信念のなかにも道徳的亜信念とよばれる心的状態がある。そして第2に、進化心理学の知見は、われわれがもつさまざまな道徳的亜信念の存在と特徴を明らかにしてくれることを通じて、われわれの道徳性を教えてくれると同時に、われわれが従うべき規範を導き出すのにも役に立つ。以上のことから、進化心理学は記述的倫理学と指令的倫理学（後者がなんであるのかについては後述する）の両方を推し進めてくれるものだというのが、本論文の最終的な主張である。

道徳的亜信念説

まずは「道徳的亜信念」という概念から見ていこう。ちょうど信念のなかに道徳的信念とよばれる心的状態があるのと同じく、亜信念のなかにも道徳的亜信念とよばれる心的状態があると考えられる (Kriegel 2015)。「道徳的亜信念」とは、「血縁者は助けるべき存在だ」という亜信念 (正確には〈身内。大事! 助けよう!〉などといった亜信念) や「仲間を裏切るのは正しくない」という亜信念 (正確には〈裏切り。最低! 懲らしめよう!〉などといった亜信念) のように、およそなんらかの道徳規範がその内容に含まれるような亜信念のことを指す。こうした心的状態の存在がわかりやすく浮かび上がってくるのは、やはりわれわれのふるまいと道徳的信念が互いに噛み合っていないような場面である。たとえば、以下のような事例を考えてみよう。

【未熟な功利主義者事例 (Helm 2001)】

Cassieはもともと多くのお金と労力をファッションに注ぎ込んできた。しかしあるとき倫理学を学んで功利主義者になり、「こんなことにお金と労力を使うくらいなら、最大多数の最大幸福をもたらすべく、貧しい人々の援助に使うべきだ」と信じるようになった。にもかかわらず、彼女は質素な格好をすることにはいまでもうんざりしてしまう。

ここでさらにCassieは、通販サイトでブランドものの高い洋服を見るといまでもつつい購入ボタンを押してしまうものとしよう。こうしたCassieのふるまいをどのように説明したらよいだろうか。すでに明らかなように、彼女の道徳的亜信念なる心的状態によって説明するとうまくいく、というのが亜信念説からの答えとなる。つまり、彼女は道徳的信念のうえでは「ファッションに高額を注ぎ込むべきではない」と思っているがゆえに、道徳的亜信念のうえでは「ファッションに高額を注ぎ込んでよい」と思っているがゆえに、つつい自らの道徳的信念に反するふるまいをしてしまうというわけである。

以上は架空の例だが、同じようにわれわれが自らの道徳的信念に反するような亜信念を働かせてしまうような事例は現実にもたくさんある。そのなかでも特に深刻な例は、Gendler (2008b) やKriegel (2015) も取り上げるように、人種差別をめぐるわれわれの両面性であろう⁽¹⁰⁾。すでに触れたように、現代人の多くは (少なくとも過去の人々と比べればかなりの程度) 反人種差別的な信念をもつようになってきたと考えられる。しかし、たとえ意識的には反人種差別主義に立っていたとしても、実際の場面ではつつい異人種に対して否定的な情動やふるまいを示してしまうということが往々にしてある。このような両面的な状況を亜信念説の枠組みで説明

(10) ただし、「道徳的亜信念」(moral alief) という用語自体はKriegel (2015) によるものであり、Gendler (2008a, 2008b) は用いていない。

すると、要するに多くの人々は反人種差別的な道徳的信念と人種差別的な道徳的亜信念の両方をもってしまっているということになるだろう。

われわれの多くがこうした人種差別的な道徳的亜信念をもっていることを示す経験的証拠は、少なからずある。Gendler (2008b) が挙げる事例をいくつか見てみよう。たとえば、(氏名以外が) 同じ内容の履歴書でも、いわゆる「黒人的」な名前 (e.g., “Jamal” や “Lakisha”) の書かれた履歴書のほうが、いわゆる「白人的」な名前 (e.g., “Emily” や “Greg”) の書かれた履歴書よりも面接に呼ばれにくい (Bertrand & Mullainathan 2003)。あるいは、アメリカの白人実験参加者や黒人実験参加者は、同人種よりも異人種の画像を見たときに、より活発な扁桃体活動 (脅威探知に関連するとされる) を示す傾向がある (Amodio et al. 2003)。さらに、(妥当性をめぐり賛否両論があるが) 潜在的連合テスト (implicit association test) を受けると、自分は平等主義者だと思っているわれわれの多くが、実はさまざまな集団に対して無意識的なバイアスを抱いていることがしばしば示されてしまう。これらの証拠が妥当だとすれば、われわれの多くは道徳的信念のうえでは反人種差別的なのかもしれないが、それでも道徳的亜信念のうえでは人種差別的な傾向を抜け出せないでいるということである⁽¹¹⁾。

なお、こうした自らの道徳的信念に反する道徳的亜信念の存在は、決して道徳的に瑣末なものではない。というのも、道徳行動の場合であっても、やはり日常生活におけるわれわれのふるまいの多くは、意識的に行われるものというよりはむしろ咄嗟に行われるもの、すなわち道徳的亜信念に基づくふるまいだと考えられるからである (Kriegel 2015)。したがって、これまで道徳的信念に基づくふるまいだと素朴に考えられていたふるまいも、その多くが実は道徳的亜信念に基づいている可能性がある。さらに言えば、われわれはこうした咄嗟に行われる亜信念に基づくふるまいのほうにこそ、人々の本当の道徳性を見て取るきらいがある (ibid.)。たとえば、反人種差別的な信念を公言しつつもつつい人種差別的ふるまいを示してしまう人に対して、われわれはその信念ゆえに称賛するよりも、そのふるまいゆえに非難するほうを選ぼう (ibid.)。このように、われわれの道徳的信念に反する道徳的亜信念というのは、われわれの真の道徳性を理解するうえできわめて重要な鍵となるものなのである。

進化心理学と記述的倫理学

以上のように「道徳的亜信念」なる概念が手に入ったことで、なぜ進化心理学の知見が倫理学の研究を押し進めてくれるのかに関して、新たな見方ができるようになる。すなわち、進化倫理学はまずもってわれわれがもつ多くの道徳的亜信念の解明をもたらすがゆえに、記述的倫理学を押し進めてくれるという見方である。一般に、信念に生得的なものとは後天的なものとの2つがあるように、亜信念にも生得的なものとは後天的なものとの2つがあると考えられる (Gendler

(11) 人種をめぐる人々の潜在的なバイアスについては、社会心理学者のEberhardt (2019) が詳しく論じている。

2008b)。たとえば、人が毎日の習慣でついつい同じ冷凍食品を買い物かごに入れてしまうのは、後天的に身につけた亜信念のゆえであろうし、イヌの汚物に見えるファッジを避けてしまうのは、生得的に生まれ持った亜信念のゆえであろう⁽¹²⁾。このうち、生得的な亜信念というのは、その多くが進化によって生じたものだと考えられる⁽¹³⁾。そうだとすると、われわれがもつ道徳的亜信念の少なからぬ部分は、進化の影響を残していると期待できる。

もちろん、われわれがもつ道徳的亜信念がどれくらい進化に由来するものなのかという問題もまた、結局は程度の問題であるし、経験的な問題である。ひょっとすると、今後の進化心理学の展開次第では、現在のわれわれがもつ道徳的亜信念の多くは進化でなく後天的な要因に由来するものだということがわかってしまうかもしれない。けれども、「進化心理学による記述的倫理学」という研究プロジェクトを有意味なものとする程度には、十分に多くの道徳的亜信念が進化に由来するだろうとは考えられる。そのように考えられる理由として、ここでは2つの点を挙げておこう。

第1の理由は、進化に由来する亜信念とは生得的に組み込まれた亜信念であり、それほど簡単には乗り越えられなさそうだという点である。もちろん、よほど極端な遺伝子決定論にでも立たないかぎり、生得的な亜信念がまったく克服不可能だということにはならないだろう。しかしだとしても、そうした生得的な亜信念は、文化や理性的思考によって信念を変えるだけではただちに変わらないのが普通だろう。たとえば、無害だとわかっていながらイヌの汚物の形をしたファッジを口にすることをためらう事例を再び考えてみよう。こうしたふるまいが生じるのは、すでに述べたように、汚物のように見える物体を有害だと感じる生得的な亜信念のせいであろう。もちろん、いくら理性の声で「この物体は口にしても無害だ」と自分に言い聞かせたとしても、そのことでただちにこの亜信念をなくしたり、それに対抗する亜信念を作ったりすることはほとんど不可能に近い。もしこの亜信念を本気で乗り越えたいのであれば、少なくともそれなりの時間をかけて自らを訓練することが必要だろう。同じことは、道徳的亜信念についても言えると考えられる。われわれがもつ生得的な道徳的亜信念は、われわれのうちに深く組み込まれたものであり、後天的な要因によってそう簡単に乗り越えられるものではないだろう。そうだとすると、いまでもわれわれは進化に由来する道徳的亜信念をそれなりにたくさん保ち続けていると考えられる。

第2の理由は、進化心理学がこれまで実際に解明に取り組んできた心的状態の多くが、道徳的亜信念とよぶべき心的状態だと思われる点である。そのことを最も如実に示す事例は、しばしば物議を醸してきた、人間がもつ道徳的に好ましくない心的傾向性に関する研究であろう。よく知られているように、これまで進化心理学は、われわれのもつ道徳的に好ましくない心的

(12) Prinz (2004)によれば、汚物や嘔吐物といった動物の身体から出てくる涙以外の物質に対する普遍的な嫌悪は、細菌から身を守るために進化してきたものだと考えられる。

(13) もちろん、生得的な亜信念のなかには、遺伝的浮動など自然選択以外の要因の影響を受けて生じたものもあるかもしれない。

傾向性の一部を祖先の環境における進化的適応として説明してきた。そうした心的傾向性の例として、Kenrick (2011) は以下のようなものを挙げる。

以下は、進化心理学者が生まれつきのもの (natural) と主張するものの一部だ。男性は女性よりも殺人を犯す傾向があり、女性は排卵期により不貞になる傾向がある。また先ほど論じたように、ハーレムやスリランカに住むまったく罪なき人々への偏見は、病気に対する恐怖や懸念が引き金となって生じる。(ibid., p. 57)

仮にこのような道徳的に好ましくない心的傾向性が進化の結果としてわれわれのうちにあるのだとすると、それらは道徳的歪信念だと考えるのが自然だと思われる。なぜなら、そうした心的傾向性は、われわれの道徳的信念に反するふるまいを説明してくれるものだからである。一般にわれわれの多くは、Kenrick (2011) が挙げるような殺人行為、不貞行為、偏見を道徳的に誤ったものだとしている (でなければ、こうした行為につながる心的傾向性は進化的適応だったとする研究が物議を醸すこともなかったであろう)。しかし、にもかかわらずわれわれにそうした行為をするよう動機づける心的傾向性があるとすると、それはまさに、われわれの道徳的信念に反するふるまいを説明してくれるような心的傾向性である。だとすると、これら進化心理学が明らかにしてきた好ましくない心的傾向性とは、道徳的歪信念だと考えるのが自然だろう (さらに具体的な研究事例については、このあとすぐに簡単に触れる)。

進化心理学と指令的倫理学

以上の議論が成功していれば、進化心理学はまずもってわれわれの道徳的歪信念の解明を通じて記述倫理学を推し進めてくれると言うことができるだろう。しかしながら、話はそれだけではない。進化心理学の知見はさらに、われわれのもつ道徳的歪信念の特徴を明らかにすることで、われわれが従うべき道徳規範の一部を導き出すことにも役立つ。一般に、「われわれはなにをなすべきか」という道徳規範の探究を行う倫理学の分野として、規範倫理学 (normative ethics) と応用倫理学 (applied ethics) が挙げられる。以下ではこれらの分野をまとめて、「記述的倫理学」に対比するかたちで「指令的倫理学」(prescriptive ethics) とよぶことにしよう。この言葉を用いていま述べた主張を言い直すと、結局進化心理学の知見は記述的倫理学だけではなく、指令的倫理学にも一定の貢献を与えるものだということになる。

それでは、進化心理学の知見はいったいいかにして指令的倫理学を推し進めてくれるのだろうか。すぐに考えられる答えは、道徳規範の導出に役立つなんらかの事実命題を与えてくれることによって、というものである。もちろん、心理学的な事実命題 (「～である」) からそのまま「～すべきである」という規範命題を導き出すことは、いわゆる Hume の法則を犯すこととなり、間違っているだろう。しかしながら、心理学的な事実命題と既存の規範命題とを結びつ

けることで新たな規範命題を導き出すこと自体は、それほど問題含みではない。

たとえば、経験的探究の結果、「他者による管理に身を委ねれば、仕事の先延ばしは減らせる」という心理学的な事実が得られたとしよう(Heath & Anderson 2010)。こうした事実命題と、「仕事の先延ばしは減らすべきである」という既存の規範命題とを結びつけることによって、「他者による管理に身を委ねるべきである」という新たな規範命題を導き出すことができるはずだ⁽¹⁴⁾。同じことは、進化心理学においても言える。進化心理学が教えてくれる心理学的な事実命題を、すでにある規範命題と結びつけることで、われわれは新たな道徳規範を得ることができる。その場合、やはり進化心理学の知見は指令的倫理学の推進をもたらすということが言えるだろう。

このように心理学的な事実命題と既存の規範命題を結びつけて新たな規範を導くという進化倫理学のあり方は、すでにいろいろな論者によって何度も言われてきたことである(e.g., Kitcher 1994)。以下では最後に、こうした進化心理学に基づく指令的倫理学がどのようになされるかの一例として、人種差別の例を考えてみることにしたい。われわれの多くは、一方では反人種差別的な道徳的信念を抱いていながら、他方で人種差別的な道徳的亜信念を抱いている。しかし、こうした人種差別的な道徳的亜信念(e.g., <よそ者。危ない! 避けよう!>)は、往々にして実際の場面で好ましくないふるまい(e.g., 特定人種の回避)をもたらすものであるから、可能なかぎり乗り越えていくべきものであろう。つまり、「人種差別的な亜信念は乗り越えるべきである」という道徳規範をわれわれはすでにもっているはずである。では、この道徳規範を実行に移すにはどうすべきなのだろうか。

ここで参考になるのが、偏見情動の由来をめぐってなされた、進化心理学者のCottrell & Neuberg (2005)による研究である。彼らはまず、情動偏見とは脅威から身を守るための防衛反応が、(現実には脅威がない場面で過剰に)発動したものであり、ある種の進化的な適応だという仮説を立てた。一般に「偏見」と言うと、どんな対象に対する偏見も、同じ1種類の情動だと思いがちである。しかし、仮にもし偏見情動が脅威への過剰な防衛反応だとすると、知覚される脅威が異なればそれに対応して出てくる防衛反応も異なってくる。たとえば、健康に対する脅威に対しては嫉妬ではなく嫌悪が適応的な防衛反応だろうし、身体の安全に対する脅威に対しては憐憫ではなく恐怖が適応的な防衛反応だろう。するとここから、社会における偏見被害集団は、それぞれの知覚されがちな脅威に応じて異なる種類の偏見情動を抱かれやすいという予測が立つ。

そこでCottrell & Neuberg (2005)は、ヨーロッパ系アメリカ人の学部生235人に、9つの集

(14)ただし、ここで得られる規範は最終的なものというより、他の事情によって覆されることが可能なひとまずの(pro tanto)ものだと考えられる(この点を明確にご指摘してくださった片岡雅知氏にお礼申し上げます)。たとえば、すべてを考慮に入れた結果、他者による管理に身を委ねるということ自体に(悪しき父権主義であるなどの)道徳的な問題があるとしたら、その場合は「他者による管理に身を委ねるべきである」という規範は不適當だということになるだろう。

団 (e.g., アフリカ系アメリカ人、ゲイ男性) に対して抱く各種情動 (e.g., 嫌悪、恐怖) の程度を答えさせるとともに、これらの集団がアメリカ市民に与える各種脅威 (e.g., 健康への脅威、身体的安全への脅威) の程度を答えさせた。その結果を簡単に述べると、やはり一言で「偏見被害集団」と言っても集団によって知覚される脅威の種類が異なり、またそれに応じて抱かれる偏見情動の種類も異なっていた。つまり、仮にこの研究結果が正しいとすると、もし人種差別的な道徳的亜信念を乗り越えたいなら、まずはいま対処しようとしている差別がどの集団に対するものであり、その集団がどういう脅威を知覚されがちなのかをはっきりさせる必要がある。

ここから新たな道徳規範を導き出すまではあと少しである。まずは、当該の被差別集団が不当に知覚されがちな脅威とはなんなのかを明らかにするとともに、そうした脅威の知覚はどうすればなくなるのかについての心理学的知見を深めていけばよい。そうした探究がうまくいけば、最終的には「かくかくの集団に対する人種差別的な道徳的亜信念は、しかじかの介入によって乗り越えることができる」という事実命題が得られるだろう。この命題と、「かくかくの集団に対する人種差別的な道徳的亜信念は乗り越えるべきである」という規範命題が結びつくことで、「しかじかの介入をするべきである」という新たな規範命題が導き出される⁽¹⁵⁾。こうして、進化心理学の力を借りることによって、人種差別的な道徳的亜信念の克服のためにわれわれはなにをなすべきかという指令的倫理学の探究も推し進めることができるのである。

5. おわりに

本論文の議論をまとめよう。まず第2節では、進化心理学の知見は道徳的信念の解明をもたらすという立場を取り上げ、そこに1つの疑念が付きまとうことを見た。ついで第3節では、人間には信念とは別に亜信念なる心的状態があるとする亜信念説の概略を Gendler (2008a, 2008b) の説明に従い見て取った。そして第4節では、進化心理学の知見は少なくとも道徳的亜信念の解明をもたらすということ、および道徳的亜信念の解明は記述的倫理学や指令的倫理学を推し進めることができるということ、それぞれ論じた。以上の議論を踏まえ本論文では、進化心理学の知見は道徳的亜信念の解明をもたらすがゆえに、記述的倫理学と指令的倫理学の両方を推し進めると結論したい。

なお、本論文の主張の強さについて1点だけ注意点を述べておきたい。本論文は、ここまで述べてきたような道徳的信念の解明に基づく記述的倫理学や指令的倫理学の推進が進化倫理学

(15) この場合もやはり、得られる規範はひとまずのものだと考えられる。たとえば、「アジア系住民に対する人種差別的な道徳的亜信念は、違法薬物の使用によって乗り越えることができる」としても、すべてを考慮に入れた結果、違法薬物の使用自体に道徳的な問題があるとしたら、その場合は「違法薬物を用いるべきである」という規範は不適當だということになるだろう (この点の明確化を促してくださった藤川直也氏にお礼申し上げます)。

の唯一の形態だとまでは主張しない。周知のとおり、進化倫理学のありうる形態としてはほかにもいくつかの案が出されており、それらがうまくいっているのかについては別個の検討を要する。たとえば、メタ倫理的な進化倫理学の試みとして近年では進化的暴露論証 (evolutionary debunking arguments) とよばれる議論が注目を浴びてきた (see Kahane 2011)。しかしこうした議論の成否については、別個の検討が必要である⁽¹⁶⁾。

最後に、Kenrick (2011) の言葉を引用することで、本論文の結語としたい。進化心理学は人間のもつ好ましくない傾向性 (本論文で言うところの好ましくない道徳的歪信念) を正当化する悪しき試みだというよくある誤解に対して、それはまったくの間違いだと彼は論じる。むしろ進化心理学は、好ましくない傾向性を乗り越えるのに大いに役に立つのである。彼は言う。

もしよりよい世界に住みたいなら、人間行動の実際の源泉 [引用者註：道徳的歪信念] について教えてくれる、優れた偏りのない科学 [引用者註：進化心理学] が必要だ。慰めにはなくても間違っている観点など不要だ。なぜなら、そんなものは効果のない介入を生み出すことにつながる可能性があるからだ。(ibid.)

参考文献

- Amodio, D. M., Harmon-Jones, E., & Devine, P. G. (2003). Individual differences in the activation and control of affective race bias as assessed by startle eyeblink response and self-report. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(4), 738-53.
- Bertrand, M., & Mullainathan, S. (2003). Are Emily and Greg more employable than Lakisha and Jamal? A field experiment on labor market discrimination (Working Paper 9873). Cambridge, MA: National Bureau of Economic Research.
- Cottrell, C. A., & Neuberg, S. L. (2005). Different emotional reactions to different groups: A sociofunctional threat-based approach to "prejudice". *Journal of Personality and Social Psychology*, 88(5), 770-789.
- Davidson, D. (1975). Thought and talk. In S. Guttenplan (ed.), *Mind and Language* (pp. 7-23). Oxford: Oxford University Press.
- Eberhardt, J. L. (2019). *Biased: Uncovering the Hidden Prejudices That Shape Our Lives*. London: Windmill Books.
- FitzPatrick, W. J. (2014). Debunking evolutionary debunking of ethical realism. *Philosophical Studies*, 172(4), 883-904.
- Fisher, A. (2011). *Metaethics: An Introduction*. Durham: Acumen.

(16) ただし、本論文の立場と進化的暴露論証のあいだには、一定の関係があると思われる。もし本論文の言うように少なくとも一部の道徳的信念が自然選択以外の要因で生じたのであれば、(すべての道徳的信念が自然選択に由来するわけではないので) 道徳的信念に関する進化的暴露論証はうまくいかないかもしれない。もっとも、その場合も道徳的歪信念に関する進化的暴露論証は成り立つかもしれない。この可能性については、筆者が "Evolution, Morality, and the Alief/Belief Distinction" と題する口頭発表で考察を行った (<https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2017/02/post-862/>)。また逆に、道徳的信念に関する進化的暴露論証がうまくいっていれば、道徳的懐疑論が正しいことになり、本論文が示唆した進化心理学に基づく指令的倫理学の試みは成り立たないことになるだろう。

- Fodor, J. (1999). A theory of content II: The theory. In *Theory of Content and Other Essays*. Cambridge, MA: MIT Press.
Reprinted in W. G. Lycan (ed.), *Mind and Cognition: An anthology* (pp. 230–249). Malden: Blackwell.
- Gendler, T. S. (2008a). Alief and belief. *Journal of Philosophy*, 105(10), 634–663.
- Gendler, T. S. (2008b). Alief in action (and reaction). *Mind & Language*, 23(5), 552–585.
- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001). An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, 293(5537), 2105–2108.
- Hamilton, W. (1964). The genetical evolution of social behaviour, I & II. *Journal of Theoretical Biology*, 7(1), 1–16.
- Heath, J. & Anderson, J. (2010). Procrastination and the extended will. In C. Andreou & M. White (eds.), *The Thief of Time: Philosophical Essays on Procrastination* (pp. 233–252). Oxford University Press.
- Helm, B. W. (2001). *Emotional Reason: Deliberation, Motivation, and the Nature of Value*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, T. E. & Boxill, B. (2000) Kant and race. In B. Boxill (ed.), *Race and Racism* (pp. 448–471). New York: Oxford University Press.
- Huemer, M. (2016). A liberal realist answer to debunking skeptics: the empirical case for realism. *Philosophical Studies*, 173(7), 1983–2010.
- Hume, D. (1987). *Essays, Moral, Political, and Literary*. E. F. Miller (ed.). Indianapolis: Liberty Classics.
- Immerwahr, J. (1992). Hume’s revised racism. *Journal of the History of Ideas*, 53(3), 481.
- James, S. M. (2011). *An Introduction to Evolutionary Ethics*. Malden: Wiley- Blackwell.
- Kahane, G. (2010). Evolutionary debunking arguments. *Nous*, 45(1), 103–125.
- Kahneman, D. (2011). *Thinking, Fast and Slow*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Kenrick, D. T. (2011). *Sex, Murder, and the Meaning of Life: A Psychologist Investigates How Evolution, Cognition, and Complexity are Revolutionizing Our View of Human Nature*. New York: Basic Books.
- Kitcher, P. (1994). Four ways of “biologizing” ethics. In E. Sober (ed.), *Conceptual Issues in Evolutionary Biology* (pp. 439–450). Cambridge, MA: MIT Press.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (ed.), *Handbook of Socialization Theory and Research* (pp. 347–480). Rand McNally College Publishing.
- Kriegel, U. (2015). *The Varieties of Consciousness*. New York: Oxford University Press.
- Milgram, S. (1974). *Obedience to Authority: An Experimental View*. New York: Harper and Row.
- Millikan, R. G. (1995). Pushmi-pullyu representations. *Philosophical Perspectives*, 9, 185.
- Prinz, J. (2004). *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*. New York: Oxford University Press.
- Rozin, P., Millman, L., & Nemeroff, C. (1986). Operation of the laws of sympathetic magic in disgust and other domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50(4), 703–712.
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *The Quarterly Review of Biology*, 46(1), 35–57.
- Walton, K. L. (1978). Fearing fictions. *The Journal of Philosophy*, 75(1), 5.
- 小口峰樹 (2017) 「命題的態度—命題的態度をめぐるさまざまな論争」 信原幸弘編『ワードマップ心の哲学—新時代の心の科学をめぐる哲学の問い』新曜社, pp. 90–93.
- 富田昌平・山佳那美 (2014) 「幼児期における怖いもの見たさの心理の発達：怖いカード選択課題による検討」『発達心理学研究』25 (3), pp. 291–301.
- 信原幸弘 (2016) 「批判的思考の情動論的転回」楠見孝・道田泰司編『批判的思考と市民リテラシー—教育、メディア

ア、社会を変える21世紀型スキル』誠信書房, pp. 20-34.

徐坦 (2010) 〈集体主义意识, “亚信念”〉徐坦、王景编辑《科云的词》Vitamin Creative Space, pp. 174-181.

朱洪洋 (2019) 〈隐念与执行者: 教育政策执行研究新进阶〉《华东师范大学学报 (教育科学版)》37 (6), pp. 131-136.